

寄書

蠅

竹内徹太郎

仰向に寝轉んで窓越しにぼんやりと空を見つめて居た。大きい鳥が一羽自分の見て居る空を横ぎつて大いへん早く飛んだ。よく見ると其鳥は窓の内を飛んだのであつた。其鳥は蠅であつた、暫くして其蠅ではあるまいがいやな羽音をして頭のまはりを廻つて居る。手を舉げて追はふとしたとたんに其蠅は頭のまはりではなくて向ふの空で凧がうなつて居るのであつた事が分つた。こんな同じやうなことが二度も續けざまにあつたので僕はつくづく考へた——スケッチする時にこんな風に蠅を大きい鳥と見てそれが蠅であることが分らぬ内に其儘繪に描き下すことはあるまいか——無理に鳥でなくとも、木でも、山でも、また位置でも。——遠近の間違や調和のない繪が出来るのもこんな具合であらう。即ち其時の目が、また頭がぼけて居るのだ。氣がおちついて居ないのだ。其物に一心でないのだ。親切でないのだ。

寝前小言

京城 横田塔村生

○去る六月二十二日は大英國皇帝の戴冠式にして、倫敦人の夢想して居りし盛大なる祝、それは一大偉觀を呈せりとは新聞紙上にありし如く、我が朝鮮の古都にありても同盟國の帝王戴冠式なりとて、小學校生徒等の提灯行列は無邪氣に國歌を唄ひつ

、英國領事館に入れり。又朝鮮人の行列もありて日出度祝日を送りたり。

○大坂毎日新聞一万號附録として、吉田博氏の『初夏の富士』あり、余はいままでかゝる大なる繪に接したる事なく、繪は好きにても諸先生の肉筆物はいまだ一度たりとて見たるとなく、只小なる石版畫を見、寫眞版木版を見たる外なかりき、石版とてかゝる大作は初めてである。

○彼の富士の繪は『初夏の富士』と云ふよりも『富士の夕』とした方が畫題に適して居らむ、田子の浦より見たりとすれば、前面の松林は感じが薄い、然し富士は好く出來居たり、正に夕陽の没せんとして半天を紅に染めたる處、カラーは富士の景としては好く現はれ居れり。

○余は幼少の時より富士を愛したり、又山岳を愛しぬ、余の家の藏に應擧の走り書きの富士あり、其れに水戸志士の筆蹟ありたり、我家の祖は豪農にして、好く書畫を藏し、庭を作りなどして喜び居れり、然れども父の世に家財散じて古書畫まで賣られ、たゞ一つ彼の應擧の富士ありしなり、然し眞筆なるや否や不明なり。

○余は富士を愛す、余は洋畫日本畫寫眞木版の富士畫を集めて見しに、十五才の春より十九才の春までの内に新聞雜誌より切り取りしもの二百八十一枚、名々に趣きを異にし、皆好く作者の感じを現はせり。諸君此んな事はつまらぬ事であらんが、二三年も貯へて後ち見るのは實に面白い、アルパムにでもさして

置けば一層美しく面白からん。

○朝鮮にも夏來り、木蔭の讀書寫生は愉快にして且つ趣味あるなり、余一夕歩を門外に出して城壁を寫す。薰風來りて頬をなで快甚だし。

○余の諸先生を新聞雜誌紙上に於て知りたるは、大下先生の四十年、少年世界一月號の口繪よりなり、中村不折先生の矢張四十年(少年世界名家の少年時代にて)吉田先生の四十二年冬、丸山先生の四十一年夏、滿谷先生の四十二年、未醒先生の四十一年中川河合鹿子木外諸先生は大抵四十二年の秋冬の頃よりなり解散した白馬會の内にも五六人あり。大下先生はなんとしても古かりき、先生は教育家としても一家を爲すと思へり。

六月二十九日夜稿

京城スケッチ

塔村生

南山附近

朝鮮も漸く桃咲き梅李^{すも}咲いて最早散りて五月となつた、白雲が空に浮むで早や夏の氣候である、讀書にもあき日曜の此の好天氣なればとて南山に登るべく黄金町通から上に行くに農商工務局がある、其處から坂になつて明治町に出る、坂に佛蘭西の教會堂が建つて屋上の十文字架は南山より高く見えた。

銀杏の巨木があつて若々しい芽を薄緑に彩つて居る、鉛筆で寫生した、堂内より讚美歐の聲が聞えて鐘が鳴つた、坂から朝鮮街が好く見える、明治町に來て商業學校の附近を寫生すべく思

つたが好場所がない、支那領事館を通つて行くと、館内にポプラが植えてある、若芽が實に美しかった。

本町一丁目に出た、南部警察署や京城府廳の洋館にポプラ樹、三井物産會社京城郵便局邊が西洋の油繪に好く見る様な建物だ而し僕の如き素人には筆が取れないと思ふた、旭町二丁目に來ると、名古屋城の模型がある、歸つて本町を二丁目に來ると百三十銀行支店三越出張所の邊は街の繪にはなりさうな處である。

本町とは日本人居留地で、日本商品を商ふ處で、何から何まで日本と同様である。三丁目四丁目と來て今の朝鮮銀行の側を行くと、南山に行く、第一銀行巴城館ホテル等あり、町名も南山町となつて居る、僕は少用あつて五丁目の商業會議所前に出て壽町の裏町を寫生した。

何人としても本町の道狭には誰れでも困る處であらう、おまけに馬車荷車人力自轉車はやまずに往來する、雨でも雪でも降つたものなら、道の悪さはお話にならぬ、泥は街道を流れる有様である、昔は本町三四丁目邊を泥峴と呼び、今は朝鮮人多く泥峴街と呼んで居る、坂道を南山町に上れば洋館の官舎が多く建て居る。

東本願寺別院の家瓦が聳えて居る、僕は庭前の石像を見た、像は武人文人あり僧ありて、朝鮮墓に立つる物である、小山の中腹に好く見えるが、そこは所謂墓である、又庭に古鐘がある、之は名は忘れたが或る山寺にありし物なりしとか、堂内を見て南山に登つた、坂を登ると總督府前に出て、過ぎ行けば二段の